



鳥類の翼は、閉じている時と開かれた時ではまるで印象が違い、驚くことがある。それが一枚ずつになって手元にあると、今度はデザインの巧みさや不思議さに深く感心させられるのである。

本書は鳥類の羽根のみを扱った検索図鑑である。収録されているのは著者の笹川氏が16年間に収集した162種で、主に日本で普通に生息する種を扱っているが、後半には日本では迷鳥であるクロハゲウシ、動物園などの飼育種であるエミューやアフリカハゲコウなど外国産種も収録されている。

図版は全て笹川氏の手によるもので、基本的に、野外で目につきやすく、飛翔に重要な部位である風切羽根や尾羽根が示されている(小型種から中堅種の羽根では実物大)。これが、部位ごとに鳥体に生えている順に並べられ、検索に役立つ特徴などが添えられている。

本書は、鳥に関心を持ち始めた方にお薦めしたい。様々な色彩に富んだ羽根を眺めるだけで、きっと色々な発見があると思われる。

拾った羽根の落とし主を調べるには巻頭の「羽の部位別特徴」でしっかり部位を特定してから、巻末の「具体的

の精密さに多少の不安があるので、生態写真図鑑などと併用するとよいだろう。また、著者が収集した羽根を図版に利用しているため、羽根の欠損部がそのまま表現されているものがある。著者が収集できなかった羽根は描かれないから、例えば風切羽根において、その種の持つ風切羽根を全て図示できない場合もある。加えて、部位の配列の統一など図鑑としての使い勝手の良さに配慮することも望まれる。

近年、鳥に関心を持つ人の急増に伴って、フィールドガイドや目・科レベルの図鑑では優れたものが多数出版されている。しかし、本書のような羽根専門の図鑑となると、日本においては他に類をみない。(洋書には鳥類の足跡や羽根などのフィールドサインを扱った類書がある)。今後このような分野の書籍は、ますます需要が高まると思われ、最初の試みとして大変意義があるものと思う。

(本社調査室・佐藤美穂子)



な羽根の調べ方」に沿って検索する。落とし主を探し出したら、決め手になった特徴などを図鑑の余白に書き込むのも面白い。

ただ、検索図鑑としては本書の図版は今一つ未熟であり、形状や色彩など



『ランドスケープデザイン(Landscape Design)』は『ジャパニランドスケープ(JL)』の企画・編集に携わっていたマルモ・プランニング社が本年6月に創刊した新雑誌である。この雑誌のコンセプトは「人と自然が交感する(共に生きる)ニューデザイン」で、創刊の案内には次のような文章が書かれている。

- バブル経済の崩壊、「阪神・淡路大震災」と立て続けに日本を襲った人災・天災により、今日、日本社会は大きな変革を迫られています。「カタチ」あるものはいつか崩れることを、この大震災は教訓として私たちに残してくれました。私たちは「何か大切なコトを見失ってはいないでしょうか。「カタチ」のみを追い求めていた近代合理主義に支えられた「デザイン」の時代が終焉を迎えつつあり、「地球環境時代」と言われる中で、人と自然が共に生きていくための新たなランドスケープの世界にこそ、私たちが真に求める次代のデザインの姿があるように思えてなりません。-

私には、この言葉にマルモ・プラン

ニングがこの雑誌を作る姿勢・目的の全てが示されているように思える。確かに、今まで環境づくりにおいて「カタチ」のデザインすなわちビジュアルな面が重視されていたのは間違いない。もちろん視覚の動物である人間が使う空間である以上、ビジュアルな面



で質の高い空間づくりが要求されることは事実だ。しかし、今日の最大の課題である「人間と自然の共生」という観点から環境づくりを考えた時、ビジュアルではない(目に見えない)部分の重要性がクローズアップされてくる。

例えば、施工段階でどれだけ環境負荷を小さくすることができたか、また、土壌、風、雨水など普通は視覚的に認知されない無機的環境に対してど

れだけ配慮することができたか、極端な例では、(遺伝子レベルの問題として)在来の樹木を活用しているか、などである。さらに、利用という観点からも、阪神大震災で実証された公園の機能も普段は目に見えないものであるし、また、公園そのものを作ることよりも、公園を利用する人々の生き生きとした姿のほうが大事かもしれない。このような視点から「環境づくり」を捉え、情報を発信していくことの重要性を強く感じる。

創刊号の中で、「自然」に関連する記事としては以下のようなものがあり、それぞれ興味深い。是非、定期購読をお薦めする。

- 都心のビルに花鳥風月の山
- ~ アクロス福岡のステップガーデン庭を能くする建築家・第1回
- ~ SUM建築研究所サワガニと小鳥が先に引っ越す住環境づくり
- 水系 - 都市と自然生態系をめぐるライフライン

(高塚 敏)

様々な分野の人が、様々な角度から 情報を提供し合って

第26回緑化工学会研究発表会

1995.6.6 於 京大会館 主催 日本緑化工学会

最近、エコアップ、ビオトープ等の仕事で、「このような群落にしたい!」と目標となる群落を設定することも多い。では、どうしたらその群落をより確実に、より早く、創造または復元できるかと問われると悩んでしまう。それは、目標とした群落を構成する種ひとつひとつの生育環境、生活史(一年を通じて、いつ展葉し、開花し、結実するのか、発芽してからどのくらいで開花、結実するか等)が解明されていないこと。さらに、播種するにも、苗木植栽するにもその方法に関する情報が少ないからである。

そんな中、第26回緑化工学会研究発表会に参加し、興味深く参考になる発表を聞くことができたので紹介したい。

私の聞いた一日目の発表は、種子の発芽、苗木の成長等についての発表が

多く、その中で特に関心を引いたのは「ワンド・水生部の植生と群落構成種の発芽率」「現地採取植物の利用に関する基礎的調査」「在来木本植物の発芽・初期成育特性(1)」等である。

これらの発表に共通しているのは、在来種の種子を扱っていること、在来種は発芽率が低いとされているがその課題を突破すべく、どのような条件で発芽率が高くなるかを実験していることである。例えば、いつ種子を採取すれば発芽率が高いか、水分条件や温度条件による発芽率の違い、いつ播種したら発芽率が高いか等の実験をしている。これらの発表から、発芽、初期生育の特性には様々なタイプがあることがわかった。今回実験された種の播種による植生回復については、今後、非常に参考になる。しかし、発芽特性が明らかにされた種は非常に少なく、

様々なタイプの群落を復元するためにはその構成種の発芽特性を明らかにする必要があり、残された課題は大きい。

ただ、私達、調査を主な仕事とするものにとって、発芽特性の実験はむずかしいが、情報を野外で収集することは可能であろう。例えば、調査の際、明らかに充実した種子を見つけた際には、種名、日付を記載していくようなことを積み重ねれば、種子の採取時期の選定の参考になるだろう。

このように、在来種による植生の回復という取り組みがやっと始まった状況では、様々な分野の人が、様々な角度から情報を提供し合って取り組むことが必要で、誰かがやってくれるのを待ってばかりいてはだめなのかなと反省した一日となった。

(大阪支社調査室・石山麻子)

良いものは残す方向で、その上で改善を

第11回水郷水都全国会議『都市河川新時代』 第一分科会「まちづくりと川づくりの一体化」

1995.7.29 於 横浜市教育文化センター 主催 水郷水都全国会議実行委員会

水郷水都全国会議は、琵琶湖の水質保全に取り組んでいる滋賀県の呼びかけで1984年に開催された「第1回世界湖沼会議」を契機に発足しました。

この会議に参加した市民らが集まって、木原啓吉氏(千葉大教授)を代表に全国の水辺をテーマとして河川、湖沼、湧水等の保全と再生について議論を重ねてきました。「親水権」「川と森との連携」など、新しい提案をし続けながら、先進事例を学び合い、交流を深めています。

開催地は持ち回りで、11回目を迎える今回は横浜で開かれました。全国各地より、水環境の保全・再生やまちづ

くりに取り組んでいる市民をはじめ、自治体職員、河川管理者、事業者、プランナー、学生ら約900人が参加しました。

私は生物の技術者ではありませんが、第一分科会の「まちづくりと川づくりの一体化」に参加しました。その中で特に、鹿児島県防災フォーラムの上野孝敏氏の「現代人の川づくり戒める岩永三五郎:鹿児島甲突川の五大石橋の保全運動」の話は興味深かったです。甲突川には、岩永三五郎が築いた五大石橋の1つ西田橋があるのですが、今現在も、治水対策に役立っているそうです。ところが、県は初め「西

田橋等を残す治水対策の方が流域を守ることと合致する」と言っていたのに、今になって西田橋を撤去すると言っているそうです。

個人的な感想として、良いものは残す方向で考えて、その上で改善できるところを変えていけばいいのではないかと思います。

今後、西田橋がどうなっていくのか見守っていきたいと思います。これからも、この水郷水都全国会議が長く続いて一般の人にも幅広く知られることを望みます。

(本社管理室・梅村浩)